と三年となりました。最後の年の東海ブロックで開催される全国総体に挑戦します。

「パラスポーツで自己実現」

沼津特別支援学校
神田いずみ（昭61卒）

人は誰もが「夢」をもっています。しかし、それを叶えたり、達成したりすることは、決して簡単なことではありません。

「静岡から世界で活躍する知的陸上選手の育成を」という声に背中を押していただきながら、教え子達と歩んだ十二年間は、とてつもないパワーに導かれていた様にも感じています。つまずいたり、転んだりしながらたくましく立ち上がり、「夢」を一途に一歩ずつ実現していった知的障害のある教え子達。富士特別支援学校に勤務していた時代に出会った彼らから、私は実に多くのことを学び、喜びをもらいました。

「夢」の始まりは、富士特別支援学校に赴任した十二年前にさかのぼります。高等部で出会った知的障害のある生徒達。ある生徒の一言から運命が動き出しました。

「陸上部を作ってください。」

サッカー部が主流の中、陸上大会前に二週間のみ活動する陸上部が誕生したのです。しかし、限られた期間のみでは記録の向上や入賞をねらいたい生徒達の希望にそうことは困難であり、部活動に限界を感じて悩んだ日々でした。

「生徒達の希望を叶え、卒業後も続けられる環境を整えたい」という思いから一念発起し、東部地区のハンディキャップ陸上教室へのチャレンジを決意しました。

環境を整えたことで、多くの高等部生や卒業生が参加するようになり、全国大会で活躍する選手も毎年増えていきました。

そんな中、教え子の言葉が大きく私の心を突き動かしました。

「今まで色々な事を諦めてた。初めて全力を出せる陸上に出会ったんだ。」障害があることで様々な葛藤をしてきたことがうかがえる一言でした。「夢」や「目標」の達成のためには、新たなチャレンジが必要となりました。日本知的障害者陸上連盟主催の日本選手権への参加です。そして、四人が「日本代表指定選手」となったのです。その後、一人は市町村駅伝の富士市代表選手（知的障害者として初めて）となり、三、〇〇〇メートル障害で日本新記録を出し、もう一人は、走幅跳で日本新記録を出し、リオパラリンピックの重点強化選手になりました。

日本代表となった二人の教え子と共に、私も昨年九月にＩＮＡＳグローバルゲームス（世界大会）に日本の強化コーチとして参加しました。二人共全力を出し切り見事四位に入賞。「夢」の達成に立ち会えた喜びと感動は図りしれません。「夢」の自己実現は日々の努力と信じ抜く心の強さだと感じています。決して諦めず可能性を信じる強さを教わりました。一人一人の特性や適性を活かす場を作り出すこと、かけがえのない仲間やサポート体制を作ることなどを今後も心掛けていきたいと思います。その後も二人の選手が日本新記録を再更新しました。彼らの「夢」の自己実現は、まだまだ続いています。

高校教員になって

浜松日体中・高等学校
北脇一正（平22卒）

高校生のとき中学生にバレーボールを教えたことが、教員になりたいと思ったきっかけでした。技術を吸収しようとひたむきに努力し、私の言葉を一生懸命聞こうとしてくれる姿に感激を受けました。

「教えるって楽しい」そんな感覚だったと思います。また、高校時代の恩師から「教員としてまた戻って来い」この言葉がさらに教員になろうと強く決心させてくれました。

今年度より母校である、浜松日体中・高等学校で教諭となり、教員としての第一歩を踏み出すことができました。思い起こせば教諭となるまでに、さまざまな経験をしました。

「学生にバレーボールの指導をしたい」という思いを胸に高校を卒業し、体育教員になるため日本体育大学に入学しました。卒業後は公立中学校や青少年の家での講師を経て、母校に戻り、二年間の講師生活を経て、晴れて教諭として、さらに男子バレーボール部の顧問として、教員人生がスタートしました。

講師時代の経験が私を大きく成長させてくれたと思います。公立中学校では担任として学級経営の難しさを実感しました。

中学生という思春期の時期にあたる生徒たちへの言葉の配慮、保護者対応など戸惑うことも多くありました。しかし、私の言葉や行動で生徒が日々変化していく姿を体験できる喜びも感じることができました。

青少年の家では幼稚園児、小学生などの年代と接する機会が多く、安全対策や施設管理の大切さを学ぶとともに丁寧な指導や言葉遣いを深く考えることができました。

これらの経験が私を成長させ、教員として生涯全うしていこうと強く覚悟を持つことができました。

また、採用試験を毎年受けていく中で私は日体大の組織力の強さを感じました。残念ながら毎年二次試験で不合格となり、公立教員にはなれ